



「子育てに学ぶ 幼いこどものだだこね」

大人だけの生活は静かでそれはそれで良いものだと思えます。私たち夫婦は我が子が巣立ってからしばらく二人だけで暮らしたのでその自由でゆったりした生活は何物にも代えがたいものがありました。大人だけの生活だと大人の想いをストレートに実現できますし何事も計画通りに進みます。夕食をつくるのがしんどい時には外食も問題なくできましたし、大人としての会話も楽しんでいました。

そんな捨てがたい生活様式でしたが、こどものいる息子家族が食卓に加わるようになってその環境は一変しました。月のような静けさから太陽のような輝きが変わったのです。たった一人の小さなこどもの存在は私たち夫婦の生活に大きな喜びをもたらしました。我が子が幼かった時に心がけていた幼い子に合わせた食事やリズムある規則正しい生活やこどもに配慮した会話など、こどもの成長を第一に考えた制約のある生活様式が舞い戻ってきました。

こどもは未来そのものです。日々成長し笑いを届け、喜びをもたらしてくれます。静かな生活も良いけれど、幼い子との希望に満ちた生活は何と良いものでしょう。可愛すぎて困ります。何でもこどもの言うことを聞いてしまいたくなります。

幼い子は多岐にわたっていろいろな要求をしますが、もちろんいつでも何でもOKという訳にはいきません。ところが私たちはついつい『〇〇ちゃん、先に遊ぶ？それとも食べる？』『△△ちゃん、お風呂入る？』『どっちが好き？』等々、意向を聞いたり選ばせたりしてしまいます。大人はこどもが健やかに育つために言いなりになるべきではないと分かっていると思いますが、実際その場にいると『希望があるかもしれない』とか、『気持ちを尊重しなくては』と思ってしまうのです。

ある時、お父さんらしき人がテーブルに置いてある食べ物を指さしてこどもに『お父さん、これ食べてもいいかな？』と尋ねていました。優しそうなお父さんでした。可愛さ故なのだと気持ちはわかりましたが、こうなるともうその大人はこどもの家来です。

幼い子の希望や欲求は大人にとっては些細なことが多いので、尊重してあげたいと思ってしまうでしょう。大人がこどもの言いなりになってしまう場面に出くわすたびに、『本当にそれでいいの？』と思ってしまう。そのような関係を続ければ続けるほど子育てが大変になるからです。そのような関係はこどもをただ混乱に陥れるだけです。なぜなら幼い子は人生を歩き始めたばかりで、何かを決めたり希望を持ったりするための明確な基準を持っている訳ではないからです。

幼い子はどのように暮らして良いかさえ知りません。物や人との関係は始まったばかりです。知らないで全身で問うてきます。時には大泣きし反抗しぐずって大人を手こずらせるので、大人としては『いいよいいよ』と言って許してやる方が楽ですが、そんなことをすればするほどこどもの混乱と反抗は大きくなります。そして『この人は私のために何も決められない大人なのだ』と大人をバカにするようになるのです。人はバカにする人からは学べません。こども可愛さに言いなりになった結果はこどもが負わなくてはいけなくなるのです。

こどもが健やかに育つための必要な環境は大人がこどもに与えるものです。こどもに決めてもらうものではありません。面倒な小競り合いがあっても幼いこどもに迎合せず、日々一つ一つ私たち大人が吟味してしっかりと手渡していかなくては、と思うのです。

(シュタイナーようちえん NPO 法人メルヘンこども園 教師 田上恵子)